寄稿

驥尾に付して千里を致す
――丸山眞男を読む――

復旦大学歴史系　商 兆琦

二〇〇四年から二〇〇五年にかけて、北京大学の歴史学部に入ったばかりの私は、歴史研究の意義について疑問を感じ、歴史哲学の本を読み始めた。記憶が確かなら、カール・ポパーの『歴史主義の貧困』、E・H・カーの『歴史とは何か』、W・H・ウォルシュの『歴史哲学』、そして何兆武が編訳した『歴史理論と史学理論』などを乱読していたはずである。これらの著作を通して、「過去を理解することは、現在を理解することとどんな関係があるのか?」を知りたかった。しかし、これらの本を読んでもなお、私は困惑していた。無味乾燥な史実や形骸化した歴史叙述を前にして孤独を感じている歴史学の一学徒にとって、これらの理論は慰めになるかもしれない。しかし、「歴史研究は目の前の問題を解決するために役に立つのか?」という私の問いには答えてはくれなかった。

その頃、私の学部では新潟大学人文学部への交換留学制度があり、「日本に行って見てみたい」という目的で、日本語を勉強し始めた。さらに、選考を担当する先生を「学問の蓄積」と「研究能力」で説得するために、日本史の勉強を始めた。その間、自然に丸山眞男に出会った。

最初に読んだのは、區建英訳の『福沢諭吉と日本の近代化』と王中江訳の『日本政治思想史研究』の二冊であった。どちらを先に読んだかははっきり覚えていないが、初めて読んだ時の印象は今でも強く残っている。つまり、「新鮮」だった。東洋では（少なくとも中国では）珍しい文体で、独断的、教条的なマルクス主義の理論とは全く違っていた。しかも、丸山が提示する歴史認識と政治思想は、私が十数年間、常識として扱ってきた認識モデルを覆すものであった。当然ながら、丸山の著作は難解を極め、その思想の密度・幅・量ともに、私の理解をはるかに超えていることをも実感した。しかし、「無知の者は恐れ

を知らぬ」（無知者無畏）という諺があるように、丸山の著作は私の挑戦欲を刺激した。その結果、読めば読むほどのめり込み、いつの間にか丸山独特の思考と論理の渦に巻き込まれていた。私が切に感じながらも表現できなかったものを、丸山は綿密な言葉で表現し、私に強烈な揺さぶりと共鳴を与えてくれたのである。

このような震撼と共鳴の感覚は、今に至ってもとても不思議である。丸山が論じているのは、数百年以前の日本人の思考と行動であり、時空も背景もすでに全く違うのに、どうして二〇歳のある中国人読者（この人は最初でも最後でもない）に感動を与えられるのだろうか？その時の私は、丸山は何らかの根本的な問題を論じているのだと漠然と感じていた。それは、人間や社会、政治、国家のあり方の根幹に関わる問題である。人間社会が存在する限り、一八世紀の荻生徂徠、一九世紀の福沢諭吉、二〇世紀の丸山が悩んだ問題と、現代の私たちが悩んだ問題は根本的に変わることはないだろう。従って、こうした永遠の問題を真摯に探求する丸山は、時空の制限や文化と言語の隔たりをいとも容易く突破し、私の関心に衝撃を与えたのである。

振り返ってみると、丸山の著作の第一の魅力は、政治と社会に対する深く緻密な洞察にある。第二に、これらの洞察はヘーゲル弁証法によって展開され、さらに概念の形で確固な骨格と強い解釈力を与えられる。第三に、これらの抽象概念が、叙情的な文学表現と鮮やかな比喩によって示され、その説得力と論理性が一層強化されている。丸山は歴史観察、歴史解釈、弁証的推論の三者を一体化し、その結果、彼の文章は明晰でありながら深遠であり、自然で流暢でありながら示唆に富み、芸術的描写においては創造的であり、論理的な分析において厳密的である。それだけに、読みながら思わず「痛快！」と叫びたくなる。

丸山の手にかかると、歴史現象の混沌に隠れていた思想的構造、心理的基盤、権力関係などが、まるで「魔法」を施されたように浮かび上がってきて私の前に姿を現わしたのである。しかも、この知の魔法は、歴史現実を超えたファンタジーでもなく、気取った晦渋なものでもなく、一方を強調して他方を排除する片面的な深遠さでもない。丸山の「魔法」は、歴史を弁証法的に構成し、その逆説的な展開過程の秘密を垣間見せるものである。この秘密は、かつての日本を困惑させたように、現代の中国を困惑させている。私は丸山を読むことで歴史研究の意義を感じるとともに、精神的解放感を得ることができた。

丸山は、旧制第一高等学校の教養主義の代表者の一人として、西洋の哲学、思想と文学から多くの養分を吸収していた。それゆえ、丸山を読む過程で、西洋近代思想史にその名を燦然と輝かせる人たちに次々と出会った。ゲーテ、カント、ヘーゲル、ドストエフスキー、ウィンデルバント、マルクス、ヴェーバー、シュミット、マイネッケ、マンハイムなどが挙げられる。丸山は、これら偉大な先賢たちによって育てられながら、他方では東洋思想世界において彼らに新しい生命力を与えたのである。したがって、丸山を読むことによって、東洋の思想世界に独特な視点から踏み込むことができるだけでなく、一八世紀

以来のヨーロッパの思想の世界を眺めることができるのである。

丸山を読むのはとても楽しい。しかし、今日まで彼を研究する自信はない。遠くから評価し、賞賛することは、遠くから批判し、非難することと同じぐらい簡単である。しかし、丸山の著作の細部までに踏み込んで分析したり、評価したりする勇気と能力が、私には欠けていると常々感じている。丸山は計り知れない存在でもなければ、手の届かない存在でもない。しかし、学力には大きな差があり、膨大な時間と精力を使って、彼の学説を丁寧に、そして最大限に理解しない限り（それが可能であるならば）、私は彼との公平な対話をすることができない。そのため、留学中（二〇〇九年～二〇一六年）、特に博士論文執筆中の私は、常に丸山に啓発され、彼の論断を真似ることはあっても、ペンを取って議論する勇気はなかったのである。

本格的に丸山を精読し始めたのは、中国に帰国してからである。二〇一八年春、復旦大学歴史系に着任して、そして「近代日本思想文化史」、「徳川時代思想文化史」、「日本近代史研究」などのゼミを次々に開講している。これらの授業では、丸山の著作の中国語訳のほとんど（『日本政治思想史研究』、『現代政治の思想と行動』、『福沢諭吉と日本の近代化』、『忠誠と反逆』などがそれである）を、学生たちと一緒に丹念に読んできた。丸山の著作を選んだ理由は三つある。まずは、私が丸山を読みたいからである。次に、自分の感想を若き学生たちに伝えたいからである。三つ目は、優れた作品の隅々まで浸透し、その著者の言葉と考えを自分の身体に通過して再現させることが、研究能力と鑑賞能力を培う一番の方法であることを、留学の経験から知っているからである。

ここ数年、受講生は一学期あたり一〇名程度、多いときには一八名に達した。それに加えて、毎学期四～五人の学生が傍聴生として参加している。数えてみれば、この数年間でおよそ六、七十人の学生が丸山の著作（少なくとも一部）を丁寧に読んできたのである。学生たちの専攻は、歴史、中文、外国語、宗教、マルクス主義哲学、法律、国際関係、コミュニケーション学、行政学、生物、物理、コンピューターサイエンス、金融学、医学など多岐にわたる。その中には、学部生、大学院生、留学生のほか、出版社の編集者や図書館の職員もいた。授業は、日本の大学院と同じような形式で行われる。参加者は事前に指定された章節を熟読し、担当者は授業でテキストの意味を要約し、同時に自分の考察を発表する。授業中、参加者は随時質問に答え、グループ討論にも参加しなければならない。

ほとんどの学生は丸山作品を読むのは難しいと感じながらも、そこから多くのものを得たと考えているようである。その中には、中国とは全く異なる徳川の世界を知り始めた人、自分の世界観が覆されたと感じた人、丸山の歴史認識に感心した人、丸山の現実分析に感動した人などがいた。丸山を最も気に入った学生は、彼を研究対象として扱うようになり、彼との対話を試みている。丸山の民族主義論を研究する者、丸山とポストモダン思想の親和性を分析する者、丸山の「公私論」を整理する者、丸山とケンブリッジ学派の異同を比較する者がい

る。「教えるは学ぶの半ばなり」とよく言われるように、学生たちと一緒に議論する中で、私は常に丸山を再認識し、その学説の広大さと深遠さにますます敬服するようになった。初めて読むと既視感があり、何度読み返してもその都度新しい意味を発見できる。それが時を経っても衰えない名著の秘密なのかもしれない。

私は丸山を一〇年以上読んでいるが、彼の博識と碩学を除いて最も感動させられている点がさらに三つある。第一は崇高な合理主義、第二は冷静な現実感覚、第三は深い人本主義である。丸山が追求していたのは、やはり中国の魯迅や梁啓超と同じ、「国民性」の改造ではないかと思われる。もちろん、「国民性」という言葉に何らかの意味がなければ、この言い方が成り立たない。丸山が著作の中で繰り返し探究しているのは、「人」を「人」たらしめる倫理道徳、そして「人は如何に生きるべきか」という問題である。戦前の日本への反省を踏まえ、丸山は近代文明に適合した新しい倫理を真摯に追い求めた。この新しい倫理とは、人生に対する態度であり、社会に対する一般的な認識であり、同時に世界観でもある。丸山の言葉を借りて言えば、それは「主体性」であり、また、「市民道徳」とも換言できるだろう。

丸山によれば、倫理と道徳は表面的な工夫でなければ、また強制されるべき外的な要求でもなく、内在化された自律の自己要請なのである。この点において、丸山の追求するものは、孔子、キリスト、プラトン、朱熹、カントなどと大きく異なるものではなく、何よりも人格の自己完成、道徳的成熟であると思われる。中国儒教が誰もが自律した君子となることを期待しているとすれば、丸山が期待するのは、誰もが近代精神に則った自律的人格を持つことだと言えよう。

それはどんな人格なのか？　それは、自由、平和、正義、自己を尊重し、自己実現を追求すると同時に、他者を尊重して理解する人格である。「神が死んだ」後の価値の荒原の中で、現代社会の「鉄の檻」の中で、国家権力に呑み込まれず、官僚主義に翻弄されず、ニヒリズムと相対主義の罠にはまらず、教条主義や実用主義に縛られないためには、個人が頼れるのは、このような人格でなければならない。一人ひとりが勇気をもって自分の人生の意味を創造し、他人と集団と関わり続けることで、社会の改善と進歩を促進させるように努力すべきである。この丸山の追求は、高度に理性主義であると同時に、崇高かつロマンティックな人本主義的なものである。

しかし、孔子、孟子、ソクラテス、プラトンから朱熹、カント、魯迅に至るまで、三千年もの間、あらゆる時代の先賢や聖人たちが「良い生き方」を繰り返し唱えているにも関わらず、人間の行動が未だ良いといえないのは何故だろうか？　丸山の答えは、人間は問題的な存在（人間の本性は悪でも善でもなく、その中間にあり、移動できる）で、さまざまな弱点を持ち、その活動にもさまざまな欠陥があるというものである。これらの生来の弱点と欠陥は、各時代の人々の努力によって調整し、是正されなければならない。人間で構成される人間社会にはさまざまな問題があり、その問題に対処するためには、健全な政治倫理と自立した政治道徳が不可欠である。丸山は人間の不合理な

面を深く洞察し、理解することによって、その著作に明晰な現実感覚を与えている。

私にとっての丸山の魔力は、まさにこの「明晰な現実感覚」に基づいて人類の発展にとってより有益な合理主義と人本主義を構築し続けようと呼びかけているところにある。現実感覚と理想主義の追求を両立させる思考の過程、合理性を尊重しつつ非合理性を強調する弁証法的認識、現状に満足せず、現状を尊重しつつ漸進的な探究と革新を試みる理想、これらが、私が丸山を読んで得た最も素晴らしいものである。

中国には「驥尾に付して千里を致す」という古諺がある。小さな虫は自力では遠くまで飛べないが、名馬の尾について行けば千里も走れるという意味である。千里の景色を見ることで、この小さな虫も成長することができ、いつかは自分の力で飛び立ち、新しい世界を発見できるかもしれない。そして、たとえそれができなくても、道中で見た風景を多くの人に伝えることも楽しいことであろう。

附記：本文は中国語で原稿を書き上げられ、東京大学博士課程生の張瀛子さんの協力で日本語に訳出された。特筆して感謝申し上げる。